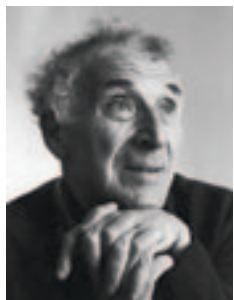


マルク・シャガール

— 愛をめぐる追想

2012年7月13日(金)～8月26日(日)



画家の肖像 1964年
Peintre français d'origine russe. 1964.
Crédit photographique : © Jean-Régis Roustan / Roger-Viollet

人生でも芸術でも、われわれが恥じらうことなく愛という言葉を口にすれば、すべては変わりうるのです。この愛という言葉はたしかにロマンティックな響きに包まれています、さしあたってこれにかわる言葉は見あたりません。真の芸術は愛にあるのです。

— マルク・シャガール

1887年に帝政ロシア(現ベラルーシ)のヴィテブスクのユダヤ人居住区に生まれたマルク・シャガールは、故郷ロシアの美術学校で絵画を学んだ後、パリに出て画家として活躍するようになり、1985年に97歳で亡くなるまで長きにわたって色彩豊かな独自の芸術世界を創出し続けました。二つの世界大戦やロシア革命に翻弄され、ナチスの脅威や愛妻ベラの死といった困難な状況に直面しつつも、油彩をはじめ、版画、ステンドグラス、陶芸といった様々な技法に取り組み、膨大な数の作品を残したこの画家は、世界でもっとも愛されている20世紀の巨匠のひとりです。

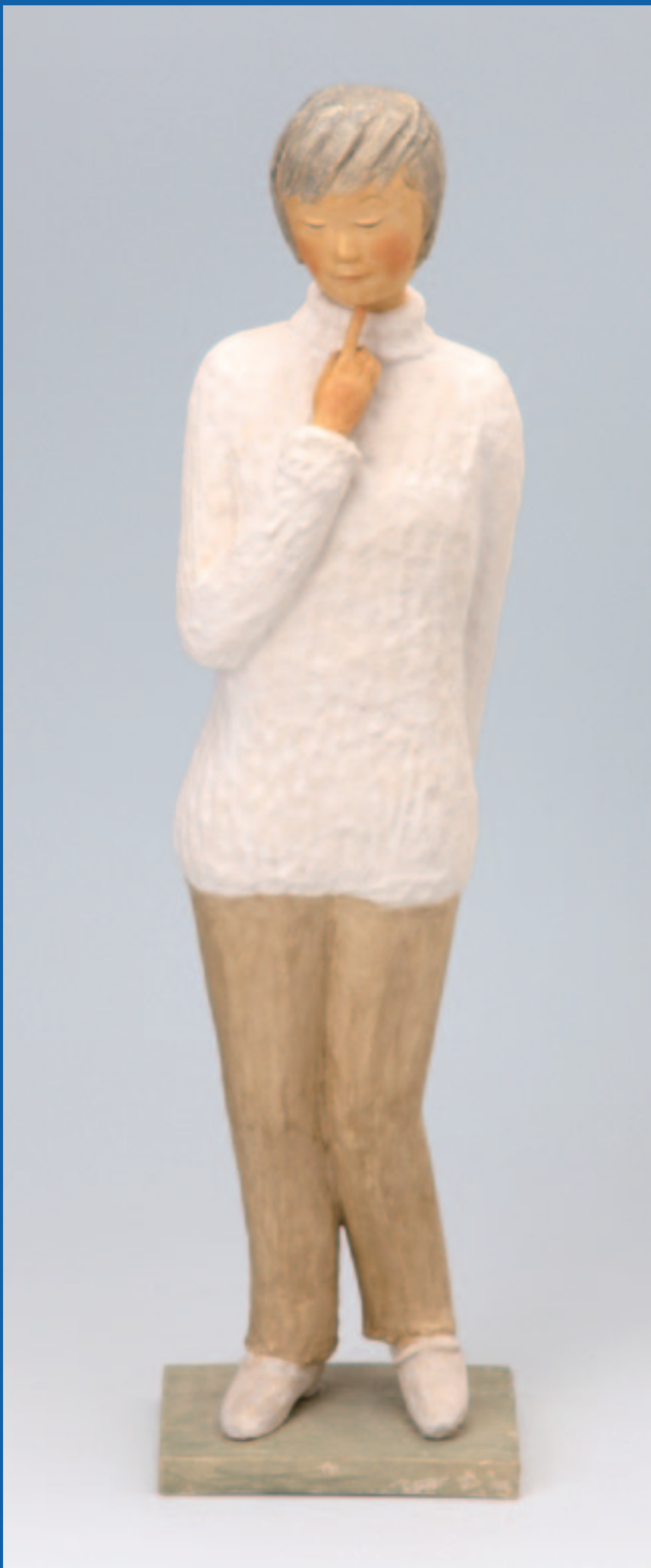
よく知られているように、シャガールの作品には、彼特有のモチーフが初期から晩年まで繰り返し登場します。抱き合う恋人たち、色鮮やかな美しい花束、新郎新婦、空を浮遊するロバや鶏や牛などの動物たち、飛翔する有翼の人物、トラー(モーセ五書)の巻物を抱えるラビ(ユダヤ教の宗教的指導者)、十字架にかけられた人物、ヴァイオリン弾きやフルート奏者といった楽師、サーカスの登場人物、あるいは故郷ロシアの町並みなどです。それらは、生まれ育ったロシアの伝統的な暮らしや宗教的背景としてのユダヤ敬虔主義(ハシディズム)、20世紀前半に経験した前衛芸術家たちとの交流、あるいはサーカスや演劇などの祝祭的で物語的な主題へのこだわり、そして自らの恋愛や結婚や家族といった個人的で具体的な様々な要素が相互に関係し合い、革新的で幻想的な形をとって生まれたものです。

そうした繰り返されるモチーフからなる独特な芸術世界を通じてシャガールは、一体何を表現してきたといえるのでしょうか。その答えはシャガール自身の言葉の中にあると思われまます。冒頭にあげた言葉は1958年にシカゴ大学で行われた講演の中で伝えられたものですが、これを読むとシャガールにとってすべての基本に愛があったということがわかります。ここでいう愛とは、ロマンティックな男女間の愛や心温まる家族間の愛だけではなく、宗教的な意味が付与される神への聖なる愛や普遍的な人間愛、さらには生きとし生けるものすべてに向けられる自然愛など、世界をより良い方向へと導いてくれる愛であり、シャガールはそのような様々な愛について思いを馳せ、愛を表現し続けたのです。

この展覧会では、日本初公開作品を多数含むスイスにある個人コレクションに国内の優品を加え、油彩画や版画などあわせて200点以上を紹介します。様々な愛を色彩豊かに描き続けた「愛の画家」シャガールの芸術世界を堪能していただけたらと思います。

【学芸員 橋村直樹】

「マルク・シャガール—愛をめぐる追想」特設サイト <http://town.sanyo.oni.co.jp/kikaku/chagall/pc>



大林蘇乃「失言」

美術館講座

「シャガール—愛の神秘」

日時：7月14日(土) 14:00～15:30

講師：鍵岡正謹(館長)

会場：地下1階講義室 定員：70名

記念コンサート

「シャガールが愛した、故郷の旋律」

演者：オルケステル・ドレイデル [樋上千寿(クラリネット)、白石雅子(アコーディオン)、高橋延吉(ドラムス)]

日時：7月22日(日) 14:00～15:30

会場：2階ホール 定員：210名

※要観覧券

美術の夕べ

「マルク・シャガール—愛をめぐる追想」展を観る

日時：7月27日(金) 8月24日(金) 18:00～19:00

講師：橋村直樹(学芸員)

※要観覧券

記念講演会

「シャガールの自伝について」

日時：7月28日(土) 14:00～15:30

講師：有木宏二(宇都宮美術館学芸員)

会場：2階ホール 定員：210名

美術館講座

「シャガール芸術のモチーフの源泉について」

日時：8月4日(土) 14:00～15:30

講師：橋村直樹(学芸員)

会場：地下1階講義室 定員：70名

ワークショップ

「モバイル～あなたの愛しいもの～」

募集期間：6月4日(月)～7月2日(月)

展示期間：7月13日(金)～8月26日(日)

対象：岡山市内小中学校

※学校と美術館の連携事業

『12夏休み小学生鑑賞教室』

日時：8月8日(水)

5年生の部：9:30～11:30

6年生の部：13:30～15:30

対象：岡山市内小学校5 / 6年生

※学校と美術館の連携事業

「ミニ・ブーケをつくろう」

日時：7月21日(土)

午前の部：10:00～12:00

午後の部：13:30～15:30

講師：土光まり氏(アトリエ・リュミエール主催)

「アート錬金術～リトグラフに挑戦!!～」

日時：8月11日(土)

10:00～16:00(途中休憩あり)

講師：岡村勇佑氏(版画家・秀アートスタジオ所属)

平成24年度 展覧会スケジュール(6月～9月)

特別展

五味太郎作品展 [絵本の時間]

5月29日(火)～7月1日(日)

マルク・シャガール—愛をめぐる追想

7月13日(金)～8月26日(日)

第63回岡山県美術展覧会

9月5日(水)～9月16日(日)

自由になれるとき—現代美術はこんなにおもしろい

9月27日(木)～11月4日(日)

岡山の美術展

特別陳列 岡山の木工芸 知られざる名工と現代の匠たち

5月22日(火)～7月1日(日)

山崎治雄の写真 第3回 美作路

9月5日(水)～10月8日(月・祝)

編集後記

美術館ニュース97号をお届けします。今号より新しく編集担当になりました。引き続き、当館の新しい情報、旬な情報をお届けして参りますので変わらずご愛読いただければと思います。7月13日からシャガール展が開催されます。夏休みに向け、関連事業も充実した内容となっております。詳細は当館ホームページに掲載されますのでそちらの方とあわせてチェックしてみてください。皆様のご来場を心よりお待ちしております。 【o.m.】

美術館ニュース 第97号

発行：2012年6月

発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
Email：kenbi@pref.okayama.lg.jp

緑蔭随想



大林蘇乃 おおはやし その
 《失言》 昭和時代

肩を落とし、人差し指を顎にあててうつむきかげんに目を伏せる少女、膝を寄せた足下もなんとなく居心地が悪そうである。タイトルは『失言』、少女は何か心にもないことを言ってしまったのだろうか。「言わなきゃよかった」と悔やむ少女の心の痛みが伝わってくるようだ。飾り気はないが、情感豊かな人形である。

大林蘇乃（一九〇〇～一九七〇）は、岡山市出身の日本画家、院展で活躍した大林千萬樹の次女として東京に生まれた。関東大震災のため転居した奈良で女学校を卒業、

桜が咲き花は散り、新緑がまぶしい。緑がおりなす木蔭に風は薫る。季節の移ろいは楽しい愁い。美術館の年度の移ろいにもまた「年々歳々花は相似たり、歳々年々人は同じからず」の語句を想う。自然の恵みから人間が育てた文化は人びとの心や生活を豊かにする。だが時に、自然は猛々しく人びとに襲いかかり地震や津波が起きる。福島から茨城に3.11以降はじめて足をふみ入れた。あれから一年が過ぎ、爪痕は痛々しいが復興は確実に進む。私たちが携わる美術館もまた被害を受けた。ハードは復興している、しかしソフトは遅延するだろう。それで良い。文化の軽々しい復興など心もとない。

北茨城市の五浦、岡倉天心が海に突き出た岩盤に建てた六角堂が十メートルの津波をうけて流失した。去る四月に早くも再建された。紺碧の海に“吹屋のベンガラ”で塗られた六角堂が映える。文化的象徴としての六角堂は再建された。継承されるべき精神の新たな再建はここからだ、六角堂を営む茨城大学五浦研究所にある平櫛田中の木彫「五浦釣人像（岡倉天心像）」を見て思う。平櫛田中は本像を三体制作している。あと一体はボストン美術館至宝展で来日し巡回している。もう一体は岡山県立美術館にある。

冬に開催予定の塩田英雄の日本画「五浦」には穏やかな五浦の海に旧六角堂が描かれている。あの海で獲れる魚介類は口にできない。フクシマ原発もたらした被害である。

I氏賞の授賞式で伊藤謙氏は「文明は進歩し続ける。進歩にブレーキをかけるのは文化の仕事」と端的に言われた。文明の近代である科学の技術（アート）は急激な進歩をしつづけ私たちの物質生活に役立つ。しかし原発を“第二の太陽”と称した人間の驕りが生んだ科学技術の開発にストップをかけられるのは、文化である芸術（アート）の役割である。人間が自己を見つづけ、深く考えつづけ、精神の生活を豊かにしてきた文化、とりわけ芸術の大いなる役割はある、とつくづく思う。

【館長 鍵岡正謹】

特別陳列 岡山の木芸

知られざる名工と現代の匠たち

会期：2012年5月22日(火)～7月1日(日)

豊かな自然に恵まれた岡山では、今日までさまざまな工芸作品が作られ、人々の生活を潤してきました。このたびの特別陳列では、「木工芸」に焦点をあて、明治、大正、昭和、平成へとつながる各時代の作家を紹介します。本展の企画には、いくつかのきっかけがありました。ひとつめは伊木三猿齋ゆかりの少林寺（岡山市）の什物調査において井上仰山の《小野宗栄像》を見つけたこと。当館には仰山の父鶴峯の《雛御殿》《賤女業置物》（寄託作品）があることから気にかけていた作家です。ふたつめは昨年度「おかやまアートコレクション探訪IV」で紹介した野崎家において中川竹仙らの作品を見つけたこと。竹仙は、県指定にもなった太田芝山の師として名前は知られていますが、なかなか作品に出会う機会がありませんでした。野崎家には玉椿象谷や逸見東洋の優れた作品があることは有名ですが、このたびの調査で竹仙をはじめ興味深い作品が多数見つかりました。

本展は、これまであまり着目されなかった作家と現代に活躍する作家とを結びつけるものです。玉椿象谷やその門人に学んだ総社の池上藏六からは亀山北峰、大野昭和齋、國本敏雄へ、象谷に憧れ、ライバル心を燃やした逸見東洋の門からは神崎軒水、平賀石泉、林鶴山へと系譜をたどることができます。また宮島から岡山へ移り、活躍した中川竹仙からは太田芝山、森田翠玉へ、師弟関係はありませんが、指物では竹仙の少し上に佐官研斎、そして今日の小川一洋、木地師の伝統は和田松山から小椋芳之へと岡山の木芸は受け継がれてきました。彼らの作品を比較すると、緻密で技巧に富んだ刀彫、玉堂富貴といった文人趣味の世界から指物や刳物、挽物といった器の造形、いかに美しい木目を見せるかへと関心が移り変わっていることがわかります。またそれらを楽しむ私たちの生活様式の変化にも気づかされるでしょう。そして、これからの木工芸のあり様はいかなるものか、私たちの生活の中にどのような姿でどれほど残り得るのか、大きな課題も見え隠れします。

【主任学芸員 福富 幸】

【主任学芸員 福富 幸】

そして人形に興味を持ち始める。30歳で上京し、平田郷陽や平櫛田中、堀柳女に師事し研鑽を積むと、戦後は日展、日本伝統工芸展、京展などに作品を発表。後進の指導にも努めた。終戦までは文楽人形や着物を着せつけた人形などを制作していたが、戦後は技巧に走らず、独創的で人間味のある人形を作った。

山崎治雄の写真

第3回 美作路

9月5日[水]



10月8日[月・祝]

山崎治雄の写真を紹介する特別展示も、昨年度に引き続き2年目になりました。今年度においては、第3回（美作路）と第4回（吉備路 10月10日 [水]～11月11日 [日]）の展示を行います。第3回目の展示では、山崎が美作路を訪ねて、風景や文化財を写した作品を、まとめて紹介します。風景については、勝山（真庭市）の町並みなどがあり、文化財については、高野神社（津山市）の隨身像などがあります。

この写真を通じて、美作の風景の美しさ、歴史・文化の豊かさに、新たに気づかされることもあるでしょう。多くの撮影旅行を通じて、このような成果を残した山崎治雄の業績が評価されます。真実を写すことにこだわった山崎は、何を記録すべきかを常に自問していたようですが、そのような姿勢でとらえた作品は、記録としても貴重であり、幅広い活用が期待されるでしょう。

【学芸員 廣瀬就久】



「勝山」

「美術館」という場所

～ワークショップ参加者の言葉から～



当館では「岡山の美術展観察日記」というワークショップを開催しています。これは、参加者が「岡山の美術展」をみた感想などをノートに記して、学芸員と交換日記のようなやりとりをするものです。継続参加を希望される方が多く、一番長い方は9年目に突入された親子参加の方です。先日ふとしたことで保護者の方とお話をする機会がありました。

観察日記に参加して9年。娘が小学校2年生の時に始めましたが、今年高校生になりました。小学校に上がるか上がらないかの頃、子どもの痛ましい事件が立て続けに起こり、安心して地域で遊ばせることに不安を感じていました。そんな時に、「観察日記」の参加募集を目にしました。当初は、小学校2年生ということもあって、親がつきっきりで一緒に作品をみていましたが、学年が上がるにつれてやり方にも慣れ、それぞれみたい作品を自由にみるようになりました。とは言ってもいつも（人に迷惑をかけはしないか等々心配だったので）目の端で子どもの様子をとらえていようとはしていました。しかし、自分も一生涯懸命になり、子どもの姿を見失うこともしばしば。そんな時は、監視員の方が『壁の向こうの作品のところへ行かれましたよ。』と教えてくださったり、『○○○だから、気をつけようね。これは美術館マナーなんだよ。』と娘に声をかけてくださる。また、展示室にいる来館者から『何してるの？見せて。上手だねえ～。』『なるほど、こんな風にもみえるのね。』と話しかけてもらう。そして展示室を出ると、ボランティアの方が『もう長いこと続けていらっしゃるんですね。』『大きくなりましたね。』と声をかけてくださる。美術館にいるいろんな人が、子どもの成長を温かいまなざしで見守ってくださる。美術館は安心して子どもが過ごせる場所ですね。



参加者活動風景

美術館でのこの光景が、地域で子どもを見守り育むことができていた、一昔前の地域社会の姿と重なったのは私だけではないと思います。美術館もまた「地域社会」であるということ、だからこそ「担う役割」があるということを感じました。美術館という場所に集う全ての人たちが、その場を共有することで生まれる「場の持つ力」をこれからも大切にしていきたいと思っています。

【主任学芸員（教育普及担当）岡本裕子】

ボランティア活動

五味太郎作品展ワークショップに向けて

開催中の「五味太郎作品展 [絵本の時間]」より、「絵本の読み聞かせと『らくがき絵本』ワークショップ」について、ボランティアの活動をご紹介します。今回のワークショップでは当館ボランティアが中心となり、五味氏の絵本による読み聞かせと「らくがき絵本」を使用し、参加者の皆様



にらくがきをして頂きます。

ボランティアのスタッフもどのよう

に楽しんでもらえるだろうか、またどんな「らくがき」が生まれるだろうか、と作戦会議中も絵本の発想の豊かさに夢中になっています。読み聞かせ練習中は、ページをめぐる度に絵や言葉の魅力に感心させられています。大人も子供も惹きつけてしまう絵本たちに、スタッフの作品選びは真剣そのもの。さて、いったいどんな作品に出会えるでしょうか？

スタッフもとても楽しみにしています。五味氏の世界、絵本の楽しさに存分に触れて頂けそうです！

【学芸員 白神由里子】



ニューフェイス紹介

4月より司書として勤務しております山本陽子と申します。主に、図書資料の管理を担当しています。全国から集められた図録など豊富な資料の中から情報を紹介したり、調べ物のお手伝いをしながら、美術館の運営のお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

山本

4月から岡山県立美術館で勤務することになりました。大山真季と申します。大学ではプロダクトデザインを専攻していました。県立美術館ではデザイン・広報の担当として、ウェブサイトの中から情報を紹介したり、調べ物のお手伝いをしながら、美術館の運営のお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

大山

こんにちは！1月より主に教育普及担当として勤務しております。白神由里子と申します。大学では英語英文学を学び、前職は岡山の園芸機器メーカーで、世界各国のお客様へ製品をお届けする業務に携わっておりました。このたび岡山県立美術館に勤めるにあたり、来館者の皆様やボランティアの皆様と美術館を繋ぎ、美術館がより親しみやすい場となるよう、精一杯努めて参りたいと思います。どうぞお気軽にお声掛け下さい。

白神